

資料⑤「『秋田に仕事がない』 正体は」

私も今年に入ってから就活をはじめ、地元秋田県に戻ってきたいと思い、秋田県の求人情報を探しました。ですが、私がやりたいと思っている栄養教諭の募集はなく、どこの地域で就職しようかととても悩んでいます。仙台市の小学校の給食実習に行った時に、給食時間に当日の給食に関連する内容の食育が行われていて、自分が小学生だったころの給食時間と比べて、熱心に食育に取り組まれているということを知りました。自分自身も横手市で子供たち相手に食育をして、健康・栄養に関する正しい知識を身につけてもらうことで、子どもたちが将来健康で元気に過ごすことができるようにしたいという思いがあります。しかし、秋田県内でも栄養教諭の枠は少なく、一度栄養教諭として働くとなったら、転職する人はなかなかいないという現状から、秋田県で栄養教諭として働くのは難しいのかなと思いました。いつか秋田で栄養教諭の募集があったら挑戦したいと思いますが、社会人 1 年目は自分のやりたい仕事をするという考えで県外での就職にしようかと考えています。ですが、できれば地元に戻ってきて仕事をしたいという気持ちがあるので、卒業までの半年でじっくり考えて就職活動を進めたいと思います。

私は、秋田県での就職が決まったこともあり、この記事に興味を持った。この記事を読んで、企業誘致で「仕事」を確保し、若者の定着を図っていくには限界がきていることを知った。筆者が提唱するのは「仕事」だけに頼らず地域性を活かした「しごと」を作り、若者の選択肢を広げようという考え方であり、当たり前のようなものであるが、読んで気付かされるものであった。ただ、私は「仕事」を選んだので簡単に諦めたくはない。企業が自社への就職に対するメリット・デメリットを理解した上で、デメリットをカバーできるだけの自社の魅力とこの地域で働くことの魅力を強く発信してもらい、若者確保を諦めないことに期待したい。私も地元を選んだ若者として微力ながらも力になっていきたい。

私は現在就活生である為、将来を見越し選択をしなければならない時期に差し掛かって来ています。就職先として、秋田県内も視野に入れているので、とても興味深い記事だなと思い読み進めていきました。記事に秋田県の産業界は、立ち遅れており、業種が少なく各企業の力が乏しいと述べられていました。しかし、他の地方においても同じことが言えるのではないかと考えます。内閣府の調査によると、大学進学・就職に伴う転出率は年々増加しているそうです。より地方と都市での格差が広がっていき、過疎や東京一極集中などの現象が起こりそれに付随する問題が起こるのだと思いました。

より魅力的な仕事の誘致、大学進学先として秋田を選んでもらうような広報活動をしていくことで、若者の移住・定住を促し、若者人口の獲得に繋がるのではないかと考えます。私も将来地元に戻る、地元以外の場所でも応援する立場でありたいと思いました。

秋田県は、少子高齢化率が 47 都道府県で第 1 位。これは、この記事に大いに関係していると私は考える。人口減少が進む中で、過疎地域をどう賑やかな地域にしていくのかがとても重要視されているが、未だ人口減少は歯止めが効かない。情報社会であるにもかかわらず、地域住民の交流が少なく、情報が回らないことも秋田には仕事が少なく、人口減少する原因であると感じた。私は現在大学 3 年であるが、地元の友人の 8 割は県外に出ており、大学の友人らも皆秋田から出て、仕事に就くことを考えている。私は、大学を卒業した後も地元である秋田で就職しようと考えている。秋田に残って就職する数少ない人材として、過疎化している秋田を賑やかにし、秋田に貢献できるよう努力したいと考える。

秋田県には、美味しい食べ物や伝統文化、自然に溢れ豊かな場所が多い。しかし、情報発信が上手ではなく、秋田の魅力を知る人は減少傾向にある。毎年多くの若者が、就職や進学のため県外へと流れてしまう。そこで、若者の力を発揮する機会を設けるために、SNS の活用には強い若者を情報発信担当として活用すればよいのではないだろうか。例えば、企業の誘致ではなく、広報担当としての採用や広告会社の企業への従事を促すことが挙げられる。また、就職活動に取り組む若者向けに、U ターン制度の改善と、有給型のインターンシップを行う必要があると考えられる。「秋田で働きたい」と思わせるには、秋田の魅力に気づかせることが必要不可欠となる。そのためには、若者のニーズや秋田に足りない要素などを調査した上で、秋田独自の就職支援を充実させ、企業の方々とのコミュニケーションを図れば良いと考えられる。若者が活躍できる環境づくりにより、秋田で働きたい人々が増えることを期待する。

私はまずこの記事の見出しに記載されている「秋田には仕事がない」という言葉にはとても共感できる。これはただ単に偏見や、なんとなくではない。「やりたい仕事が秋田にない」だとか、「県外の企業で働きたい」と私は高校時代の就職活動の時に何回も耳にしているからである。この記事には「仕事」と「しごと」を違うものと表現しているが、私はこれをとっても良い表現であると感じる。大々的な企業だけに力をいれるのではなく、地域資源を生かしたローカルな経営にもフォーカスをあてるべきだと感じる。秋田には仕事がない訳ではない。情報発信、ローカル求人情報が少なすぎるだけである。もしかしたら県外に出ていなくても、よく見渡せば魅力のある企業や仕事が見つかる可能性がある。その為これから秋田県がもっと“秋田”の良さ、地域資源を理解していくべきであると思う。

私は、この記事を読んで「仕事」と「しごと」についての違いについて薬剤師の視点でも考えられると思った。

薬剤師は、薬の提供だけでなく、地域の健康相談や予防医療に関与することで地域社会に根付き、そして地域に貢献できるような「しごと」を作り出すことができるのではないかと考えた。病院に行くことのできない高齢者のために、在宅医療などを通して高齢者を支える

ことで地元と深く結びつくような医療を提供できると考える。また、健康食品などと結びつけることで「しごと」が確立するのではないか。

以上のことから薬剤師として在宅医療、地域の特産などを使った健康食品の開発を行うことで「しごと」を作ることができ、問題が解決するのではないか。

記事の見出しになっている「秋田には仕事がない」という事実は私も実感している。というのも私自身、現状秋田で就職したいとは思っていないためであり、その原因として、「秋田には魅力的な仕事」が少ないことがある。もちろん人によって「魅力的な仕事」の定義は異なると思うが、私にとってのそれは「大学（院）で学んだことを活かすことができる」「給与面・福利厚生が優れている」「ワークライフバランスを大切にできる」仕事であることなどが挙げられるが、秋田県内の企業はあまり当てはまらない場合が多い。それも、記事中にある「秋田には労働集約型の仕事が多く、知識集約型産業が少ない」ことが原因だと考えられる。私は秋田が嫌いな訳ではなく寧ろ好きだが、そういった理由で離れざるを得ない現状を寂しく感じる。

私は大学進学の関係で県外に移り住んだことを機に、様々な県の様々な都市を目にする機会が増えました。そんな中で、人々が移り住むような魅力のある都市の共通点としてよく目にするものがあることに気が付きました。それは、その場所の「独自性」です。人々が移り住むような場所にはいたるところに目に見えるような独自性が点在しています。ただ、今の横手市を見ても独自性をあまり感じられません。横手市のように国道沿いに誘致企業の店舗が軒を連ねるような街はどこにでもあります。横手市が今行わなければならないのは若者の就職先をただ集めるのではなく、横手市の特色とは何かを模索し、それに沿って「しごと」ができる環境を作り上げることではないかと資料を読んで考えました。

この資料を読んで秋田県には仕事が少ないということがとても分かる記事であった。昔の秋田県は労働集約型の工場誘致に力を入れていた。経済学や経営学、イノベーションなどの授業から地域産業活性化のメカニズムを学んだ。このメカニズムには4つのフェーズがありこの工場誘致は経済的活況のフェーズまではスムーズに進むがその後の自律的发展には進むことが少なく、地域資源を利用したイノベーションが必要であることを知った。この記事でも同じようなことが記されており、工場誘致が必ずしも良い手段では無いことが分かる。人口の多い場所の方がいろいろな種類の仕事があるためそのために県外に流出することが多く、流出していく方の県は経済が回らなくなる悪循環に陥ると考えられる。最近ではインターネットを活用した場所を選ばない、新しいしごとの形態が出てきているのでそれを活用するのが秋田でも出来ることだと思った。

この記事は、秋田県が抱える雇用問題と地域経済の停滞を詳細に分析していると考えられる。特に若者の県外流出が深刻で、地元での雇用機会が限られていることが指摘されている。秋田県は長年、企業誘致や雇用創出に取り組んできたが、十分な成果を上げられず、結果として地域経済は低迷を続けている。記事には、企業誘致件数の推移や転出超過数のグラフが掲載されており、問題の深刻さが視覚的に示されている。また、これまでの取り組みが効果を上げられなかった理由として、地元産業の競争力不足や外部資本に頼りすぎた政策の限界が挙げられている。地域経済を再生するためには、新たなアプローチが必要であり、特に若者が魅力を感じる仕事や生活環境の整備が求められている。秋田県の現状を浮き彫りにし、今後の対策に示唆を与える内容であった。

企業誘致の持つ雇用を作り出す力は必ずしも地方が求めているものにはならないということが示されている記事でした。グラフを見るとはっきりわかるように誘致企業の件数が増えているにもかかわらず、若者のなりたい、目指す職業の拡充にはならなかったことが「秋田には職業がない」という結果を招いています。私には大学で岩手県葛巻町を歴任された二人の町長の講演を聞く機会がありました。お二方が共通して話していたのは地方は都市部よりも激しい「情報戦」が求められているということです。人が自然に集まる都市部や同じように過疎に立ち向かう他地方との差を生むにはまず私たちのふるさとの内情を知り、発信していく必要があります。

就職活動という言葉が現実を帯び始めた私にはとてもタイムリーなテーマでした。私は進学を機に上京しましたが、漠然と自分は卒業をしたら秋田に帰って就職するのだろうなと考えていました。しかし実際に就職活動を始めてみると改めて秋田での就職の難しさを感じ始めました。その難しいと感じる要素の一つである「就職先がない」という理由にはこのような背景があるのかと驚かされました。もちろん県が行った誘致が県内の働く場所を増やしたのは確かです。しかし高齢化・人口減少の進む秋田県だからこそ、これからはその中身に注目するのがより大事だと強く思いました。自分の好きな地元だからこそ、若い人が戻ってきてより賑やかな場所になって欲しいと強く思います。

秋田県の「若者にとって魅力のある職場がない」という問題が50年間指摘され続けていることに驚いた。本資料を読み、誘致企業認定制度で企業進出は進んだが、職種の多様性が不足したことで若者の県外流出が続いている、という現状に納得し、これが「秋田には仕事がない」という印象を与えていると理解した。この状況を改善するために提唱されている「仕事」と「しごと」を別に捉える考え方に共感した。単なる業績追求の「仕事」から、地域資源を活用し地域に根ざした「しごと」へシフトすることで、地域経済の好循環と愛着が育まれるだろうと感じた。バイオ系の研究に取り組む私としては、地域資源を活用した新規事業や技術革新で、秋田県に新たな価値を提供し、地域の魅力を引き出すことに貢献したい。

秋田県に仕事が少ないと言われる背景には、秋田県がこれまで誘致してきた企業が秋田県に適していなかったことが挙げられる。過疎化の一途を辿る秋田県において、労働集約型や知識集約型以上に地域密着型が求められる。地域密着型とは、土地の気候や文化、伝統を重んじたものである。例えば秋田県における地域密着型として六次産業化の取り組みが挙げられる。この産業にあたっては、農業、製造業、流通業など様々である。就くことのできる業種を増やすことこそが秋田県の仕事を増やすことであり、製造業誘致によって県内の仕事を増やすという考え方は刷新されるべきだと考える。よって、現在の秋田県がすぐに行うべきことは独自文化と必要業種の融合であると考えている。